



琉球国王尚宣威の墓とその子孫

小熊 誠（非文字資料研究センター 研究員）

はじめに

墓は、それを見る者にさまざまなことを物語ってくれる。その形からは、それを造った人の文化背景や宗教、人生観までも読み取ることができるし、そこに葬られた人を見ると家族制度や祖先崇拜の制度を知る手がかりともなる。墓も、非文字資料になりうるかもしれない。

琉球における歴代王族の墓はいくつかあるが、首里にある守礼の門から少し下がった場所にある玉陵（たまうどうん）は有名である。そこは、第二尚氏王族の墓である。1470年に第一尚氏をクーデターで倒した金丸は、尚円と名乗り、それから約400年におよぶ琉球王国の第二尚氏王統を築いた。玉陵は、1501年に尚円の息子で第三代国王である尚真によって造営されたとされている。そこは、尚円をはじめ、歴代の王や王妃、そして王子、王女も葬られる沖縄最大の墓であり、世界遺産の一つともなっている。

第二尚氏歴代の王は、玉陵に葬られているはずであるが、そこに葬られていない王が二人いる。第二代尚宣威と第七代尚寧である。

尚寧は、1609年に薩摩の侵攻を受けて敗北し、薩摩によって江戸まで連行され、幕藩体制への従属関係を強いられることとなった不運の王である。その責めを負って、玉陵に入らなかったという説もあるが、自分の出自に則った墓所に入ったというのが本筋の話とされている。つまり、尚寧は、嫡流ではあったが王家の分家となった家系の小禄殿内出身で、第六代尚永の養子となって王位に就いたため、実家である小禄家の墓所である浦添ようどれに葬られている。しかし、養子といえども実家の墓に入るのは、通常の葬り方ではないと考えられる。尚寧王の葬り方の裏に、何か特別な理由が見え隠れする。

それはそうと、本稿で取り上げるのは、第二代尚宣威の墓である。尚宣威は、初代尚円の実の弟である。尚円は、王位に即位すると、弟の尚宣威を越來間切（こえく

まぎり）（現沖縄市）の惣地頭に任じた。尚宣威は、越來王子と称され、それから6年間越來城に住むこととなる。しかし、1476年に尚円が没すると、弟の尚宣威が第二代国王に就き、首里城に移り住む。尚円には尚真という息子がいたが、まだ若干12・3歳であり、その成長までという理由で家臣に推されて弟の尚宣威が即位したとされる。ところが、ほどなくして、尚真が即位すべきだという神託が下り、在位わずか6か月で尚宣威はみずから退位して越來城に隠遁した。第三代尚真は、50年間にわたって在位して琉球王国の最盛期を築くが、他方、尚宣威は隠遁して半年で世を去った。

尚宣威は、越來で亡くなり、その遺体は第二尚氏の墓所である玉陵に葬られることなく、そのまま越來に葬られた。その墓は不祥とされているが、伝説として何か所か尚宣威の墓とされている場所がある。今回、2009年8月末に沖縄市史の調査に従事した際に、尚宣威の墓とされる場所を見学した。その墓誌には、四つの門中の銘があった。尚宣威とこれらの門中とはどのような関係にあるのか。そこには、墓に祀られている先祖とそれぞれの門中を形成する子孫の複雑な関係が見てとれる。

尚宣威王の墓と墓碑

尚宣威王の墓といわれる場所は、沖縄市の字越來にある。沖縄の古い墓は、断崖の自然洞穴やそこに掘り込んだ洞穴に造られるので、海岸や川筋の断崖がある場所に多く存在する。尚宣威王の墓も、小さな河川に面した岩山の断崖中腹にある（写真1参照）。河川と平行に走る農道から、階段を二十メートルばかり上ると小さな平地があり、そこから三メートルばかり上の断崖に掘り込まれた墓がある。入口は、ブロックで塞がれている。周囲にある古い墓とほぼ同じような形態をしており、玉陵などと比べると王の墓にしては造作がないように見受けられる。

この墓の調査が行われている。その報告書によると¹、



写真1 尚宣威王の墓と墓碑

墓内部には、2基の石製厨子の棺があり、その一つに「寛文四年」（1664年）の銘が彫られていた。これは、明らかに尚宣威の時代とは異なるもので、そこが尚宣威王の墓であるという証拠は出てきていない。それなのに、なぜここが尚宣威王の墓と考えられ、誰がそこを祀っているのか。その墓の真偽より、その墓をめぐる人々の共同幻想と、それに基づく祖先祭祀の行動に民俗学的な興味がそそられる。

この問題に関するとっかかりは、墓の下に建てられている墓誌にあった。その墓誌には、「尚宣威王御來歴」として、その生涯が紹介されている。誌文の最後に、「吾々子孫は毎年本墳墓に相集ひ御祭事を執行す、西暦一九五七年三月二十四日（昭和三十二年）清明祭執行、當日越來城跡において二百余名の參會者の賛意を得て本墳墓の修理改修と道路の工事着工昭和三十三年五月二十三日日本工事完了す」と記されている。本土復帰前の1957年に、「子孫」とされる人々がこの墓前で尚宣威王の清明祭を行っていて、さらにその「子孫」の合意のもとに墓の改修と階段の整備が行われたことがわかる。その「子孫」とは誰かに興味を持った。碑文の裏にそれが記されている。湧川家・普久原家・泉水家・角ヌ屋家と連名で子孫の名が彫られている（写真2参照）。個人の名前ではなく、〇〇家というそれぞれ異なる家系の子孫が示されている。この四つの家系は、どのような関係にあるのだろうか。

尚宣威王直系の湧川家

まず、湧川家についてその来歴をたずねてみる。湧川家は、湧川殿内（どうんち）と称される首里士族の名門である。尚宣威王には、二男一女があった。長男が、父の跡を継いで越來王子朝理と称する。彼が、王家第一の分家としての湧川殿内における始祖となっている。次男の朝易は兄の養子となって、湧川殿内第二代となり、尚真王の娘を娶っている。尚真王の妃は、朝理・朝易の姉

妹であり、王家と湧川殿内とは、密接な近親関係があった。

このように、尚王家の分家や孫分家などあまたある中で、向姓湧川家は最も歴史の深い分家となっている。その家譜は原本が残されていて、『那覇市史』に所収されている²。所収されている向姓湧川家の家譜は、乾隆28（1763）年に第十二世の湧川親方朝喬によって編集されている。琉球士族の家譜は、士族と百姓の身分を明確にする目的で、1689年に王府内に系図座が設置されて士族の作成が義務化された。その意味で、琉球家譜は公文書であり、向姓湧川家でも、少なくともその時期には先祖をたどって家譜が編纂されていた。現存して『那覇市史』に所収されているのは、それ以後に修譜されたものである。

向姓大宗世系図として、一世朝理から十七世朝升までの子孫108名が記されている。形式は、初代からはじめて、家督を継承した直系子孫とその兄弟姉妹が含まれている。家督を継がなかった傍系の男子は、分家という形で自らを初代とする家譜を分けて別の系統を作ることになる。女子は、婚出して婚家の家譜にも記載されるが、娘について生年月日、婚家、死亡年月日、墓所、号など細かく記されているのは、琉球家譜の一つの特徴といえる。

十七世は、咸豊11（1861）年に長男の朝功が継いでいるが、同治12（1873）年に子孫をもたずに病死したので、次男の朝升が兄の跡を継いでそのまま十七世となっている。家譜に記録された子孫は、ここまでである。1879年には、琉球における廃藩置県が行われ、完全に琉球王国は消滅し、同時に士族の身分も消滅した。正式な公文書としての琉球家譜もここで途絶えることになる。

士族の身分はなくなったものの、湧川家の子孫は、実際には今も存続している。その直系子孫の家が、那覇市天久にある。初代朝理から数えて二十二代目の当主が、向姓湧川家の総本家としてその位牌を守っている。まだ、若干36歳の若い当主である。

湧川家の仏壇にある位牌には、初代朝理から十七世朝功までが入っている。朝功は、同治12（1873）年に46歳で没している。明治5（1872）年に、明治政府は琉球国を廃して、琉球藩を置いている。7年後の明治12（1879）年には、琉球藩を廃して沖縄県とし、琉球処分を完了した。この歴史から見ると、湧川家の位牌は、琉球王国時代の祖先が一つの位牌に納められていることになる。この位牌は、向姓湧川門中の祖先の位牌であり、門中全体で拜む位牌である。十八世以降の祖先の位牌は、



その脇に置かれており、これは湧川本家の位牌となっている。

では、肝心の尚宣威王の位牌はどうなっているのだろうか。王廟であった崇元寺には、琉球王国の国王として舜天から始まり、第一尚氏と第二尚氏の歴代王の位牌があったと記録されている。その中に尚宣威王の位牌もあった。しかし、沖縄戦で崇元寺も消失してしまい、現在は不明である。また、第二尚氏の王廟として 1492 年に尚真王によって円覚寺が建立され、そこにも国王の位牌堂があったとされている。戦後いろいろあって、一時首里の万松院に安置されていたが、そこには第三代尚真王以下の位牌はあったが、尚円王と尚宣威王の位牌はなかった³。尚宣威王の位牌がどこにあって、現在誰が祀っているのかは現在のところ調べがつかない。湧川家の位牌に、尚宣威王は祀られていないことだけは確かである。

屋取士族の普久原門中と泉水門中

湧川家では、先々代のころまでは門中会があつて、門中行事も盛んにやっていたという。湧川家からの分家で門中会が形成されている。しかし、古い時代の分家は、家譜を分けて別の家系をつくることもある。普久原家と泉水家は、近世に湧川家から分かれた向姓湧川家の支流である。

具体的には、湧川家九世朝盛の四男朝隣が普久原家の元祖で、三男朝膺が泉水家の元祖となっている。この二人の母親は、側室の眞鶴となっている。眞鶴は、越來間切の百姓身分の出身であった。朝膺と朝隣の生年は明らかでないが、その姉妹の生年から推し量ると康熙 12 (1673) 年から康熙 16 (1677) 年の間である。朝隣以下の小宗家譜は残されており、十一世朝徹、十二世朝寛、十三世朝見、十四世朝昭と続いていく。朝隣以下、湧川里主親雲上(さとぬしパーちん)を名乗っていたが、乾隆 56 (1791) 年に本家湧川殿内と区別するために王府に願ひ出て普久原に改姓したと家譜に記されている。十三世の時代で、十四世からは普久原親雲上と記録されている。

普久原家の本家は、那覇の眞嘉比にあつて、大戦中に熊本に疎開したとき向姓小宗普久原家の家譜を持っていたので、それは戦火を逃れて現存している。尚宣威王の墓碑に書かれていた普久原家の中心は、この本家になるはずである。しかし、実際に熱心に参加しているのは、沖縄市越來周辺に多く住んでいる普久原家の人びとである。



写真2 尚宣威王墓碑の裏側

普久原家が湧川本家から分かれたのは、近世初期のことである。それ以降、現代まで世代で数えると 20 世代ほど、年数では 300 年ほどの時間が経過している。普久原家自体も、数多くの分家を輩出していることになる。越來の近くに、安慶田(あげだ)と嘉真良(かまら)という字集落があつて、そこに普久原姓が多い。

安慶田と嘉真良の普久原姓の元祖は、普久原家十二世朝寛の二男、十三世朝儀となっている。朝儀には、5 人の息子があつて、長男と二男、三男が安慶田普久原家に分かれ、五男が嘉真良普久原家に分かれたという伝承になっている。というのは、普久原本家の家譜には、朝儀までは記録されているが、朝儀以下の子孫に関する家譜記録はなかったからである。また、朝儀の子孫が記された家譜が別に作成されていたわけでもなかった。

家譜記録がないのに、なぜ安慶田と嘉真良の普久原姓の元祖が朝儀であるとわかるのか。また、士族の系統なのに朝儀以降の子孫に何故家譜がなかったのか。考えられることは、朝儀の子孫たちが首里那覇を離れて、田舎に下ったということである。ちょうどその時代、首里王府は増加した士族の失業問題に窮していた。三司官であった蔡温を中心として、さまざまな施策が行われたが、貧窮した士族が農村に行つて農業に従事することを認めた。認めたというより、奨励したといった方が正確かもしれない。士族が、田舎に下つて仮住まいする意味でヤドリ、つまり屋取といったが、そのまま定住して屋取集落を形成する場合も多かった。

屋取士族は、帰農しても従来の百姓集落に定住することなく、農業を営みつつ百姓集落とは別に集落を形成することが多くあった。とくに、沖縄本島中部にはこのような屋取集落が多くある。彼らは、帰農して土籍は失うものの、土族としての誇りを強く持ち続け、首里言葉を話し、首里文化を保持して、周囲の百姓集落とは異なる風俗習慣を継承していた。このような文化背景のもとで、家譜記録はなくても、土族出身であるという祖先からの系譜に関する知識が継承されていた。安慶田と嘉真良の普久原姓は、このような屋取士族の子孫と考えられる。泉水姓も同様である。

普久原家と泉水家の由来記

清明祭には、戦前から湧川本家や普久原本家が那覇から越来の尚宣威王の墓に来て、地元の普久原家や泉水家などと一緒に祭っていた。尚宣威王を祖先として祭る根拠は、家譜のある那覇の湧川家や普久原家は明確な系譜にあるが、安慶田と嘉真良の普久原姓は、祖先の伝説に基づくものでしかなかった。そこで、戦後になって清明祭に集まった機会に、那覇の普久原本家から系図をつくるように要請された。安慶田や嘉真良の家系ごとに、それぞれの系譜を聞き書きによって作成し、それを清明祭などに持ち寄って、それぞれの家系のつながりをさがした。古い時代のことは伝承ではわからないので、墓の骨壺の銘書を調べたりもした。最後は、系図作成の専門家に依頼して十三世朝儀以降の系譜を整理してもらった。完成したのは、昭和51年のことであった。それは、近世士族の家譜とは性格が異なるので、由来記と称している。これによって、朝儀以降、沖縄市の泡瀬や安慶田、嘉真良などにわかれた屋取士族の普久原家と泉水家の家系が、各地の伝承をより合わせることによって再構成されることとなった。

角の屋門中のもう一つの伝承

尚宣威王の墓碑にある、もう一つの門中である角の屋門中は、どのような経緯でそこに子孫として名前が記されたのであろうか。それは、他の門中とはまったく異なる伝承による。

角の屋門中の本家は、越来にある高江洲家である。この家には、戦前角の杯があり、正月などに門中の人々が集まったときにその杯に酒を入れて回し飲みをしたということから、角の屋門中と呼ばれていた。方言では、チンヌヤー門中という。

この角の屋門中は、戦前湧川門中との関係がまったくわからなかったにもかかわらず、清明祭には尚宣威王の墓だけではなく、その前に拝む尚宣威王ゆかりの井戸、火の神、越來城もまったく同じ場所を拝んでいた。その時は、なぜ湧川門中と同じ場所を拝むのかわからなかったのも、別々に拝みをしていた。角の屋門中の中でも先祖が湧川門中の先祖と同じはずだと主張する人もいたが、高江洲本家の先々代と先代は、湧川門中は土族門中であり、自分たちは百姓門中だから同じはずはないとその主張を無視していた。

角の屋門中の祖先の墓は、ペーチン墓であった。そこには、高江洲親雲上（タケーシペーチン）が葬られているという伝承しかなかった。その祖先がどのような人物であるのか、戦後になって、自分たちの祖先探しをしようということになり、ユタなどに聞いて歩いた。すると、あるユタから那覇のある家を教えられ、そこを訪ねると背の低いおばあさんがにこにこして迎えてくれるという。門中の代表がそこに訪ねてみると、そのとおりにおばあさんが迎えてくれた。そこは、湧川家の本家であった。このユタの言うことは正しいということになり、さらに自分の祖先についてユタに調べてもらおうと、尚宣威王から五代目の朝首が越來にきた時に、その川崎（カワチ）の家 にいた娘と懇ろになり、生まれた男の子が高江洲親雲上で、それが角の屋門中の始祖だということがわかった。湧川家の落胤が、角の屋門中の始祖であるので、戦前からずっと尚宣威王の墓を祭っていたということになり、それ以降、尚宣威王の墓での清明祭は、他の門中と一緒にやるようになっていく。しかしながら、角の屋門中は他の門中とは違って百姓門中であるという認識は今も変わっていない。

このように、尚宣威王からの系譜が直系である湧川家、傍系である普久原家と泉水家、そして屋取士族のため伝承で系譜がつながっている地元の普久原家と泉水家、さらに伝承の上で庶子の系統とわかった角の屋門中が、戦後から復帰前にかけて行われた祖先探しの中で尚宣威王の子孫ということになり、合同で墓の修復を行い、いまでも合同で清明祭を行っている。琉球史における非業の王である尚宣威王の墓をめぐる、それに連なるさまざまな子孫の歴史と伝承の糸がしだいに解れて明らかにされてくる。

1 沖縄県教育委員会『沖縄市文化財調査報告書第3集 尚宣威王の墓』1980年
2 那覇市企画部市史編集室『那覇市史 資料編第1巻7 家譜資料三(首里系)』1982年
3 平敷令治『沖縄の祖先祭祀』第一書房、1995年